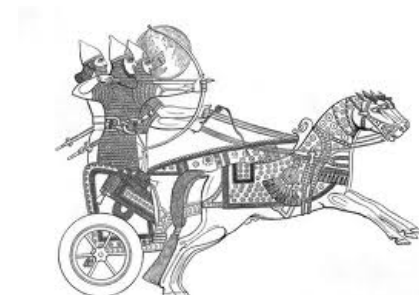




豪奢なる修羅の戯
たはぶれ



Written by
Siveeyeah

鼻尖でフラッシュをたかれたようにすべてが真っ白になる。蒼穹が裂け落ちて大霹
靂が地面を烈しく上下させる。黒くて物凄い雲が見る見る集まり、あつーと愕く余裕
もない、突然の豪雨。

まるで瀑布だ。天まで聳える洪水の壁のようだった。世界中がナイアガラだ。撃たれ
叩きまぐられ、たまらずコンビニに飛び込む。

ふう。助かったあ……。髪から雫がポタポタ。雑誌でも読むか……

*Rg*が特集された。『リグ・ヴェーダ *Rg Veda* 物語』の本が売れてハリウッド映画
になっていた頃だったからだろう。

わたしは考えもなくページをめくってながめてた。

ふーん。

絢爛な極彩色の写真は西洋人の考える神秘の India だ。『リグ・ヴェーダ』はほんら
い、ヴェーダ時代に編纂された、神を讃える聖句の集大成のはずなんだけど……

物語本はヒンドゥー教っぽいイメージで書いてると思う。たぶん雰囲気かなり違うは

ず……

だから映画の方はさらにエスカレートして……こんななんだ。

でも、一枚の写真がわたしの眼を惹いた。

それが阿修羅だと気がつくまで数秒かった。わたしが見て知っているのとは、だい
ぶ違っから。美しく、繊細で、切なくって儚く異教的な刹那性、邪教的な生命の豊穡
さを孕み、まつ毛に憂鬱、双眸は湖のように透いてまばゆい虹彩がくつきりと放射状の
麗しく、ナルシストな男の子みたいに、女性的だった。

心が魅せられ、幻の世界に巻き込まれ、陶酔して妄想をさまようあたし。

阿修羅っていうのは古代のインド神話ではアスラ族のことで、一柱の神ではなく、魔
神の一族の名称だ。普通は。

アスラ族の指揮官ラクタヴィージャ、魔王マヒシヤ、そのほかにシユムバ、ニシユム
バなんかの名前が神話に出てくる。けれど最も古いヴェーダでは、こんな風に頌えられ
ている。

『両性具有の神、ヴィシユヴァ・ループ（いつさいの形態を有する者）、神々の上に立
ち、光輝くアスラ神』

わたしの憧れだ。阿修羅になりたい。全身に神々の聖なる象徴を彩って、まばゆい光
を発して輝きたい。

Tears streamed endlessly down my cheeks.

紺碧の空も色あせるほど、強く光芒を放ちたい。

Chapter 1



甲骨文字で羊をこのように画きます。後漢の和帝の永元十二年（紀元百年）に許慎が作った『説文解字』に「羊、祥也」（羊は吉祥なり）とあります。羊は富と吉祥と見なされ、大吉大利をその昔は大吉羊と言ったそうです。「美」の字源も羊にあり、「美」は羊の角を頭に着けた姿だそうです。「善」もまた羊に由来する字です。

1 瀟洒なる憂鬱

霧雨。

狭く峻しく深い、樹塊蒼暗なる崖切り聳え立つ溪谷の粗細道を歩み、老鬚の苔が生す巨木に見下ろされつつ、傘して独峯眞神の御山を見上げる。

独虎白龍岳や龍背鬣峯などの山々を背にして屹する聖山。楠や櫟や樺や檜や辛夷や檜や榎や椎や樗などの墨鬱たる樹木に蔽われ、所々に巨石や大巖が膚を剥き出しにする。霊異な雲霞を漂わせていた。

かように眺めて想いに耽っていると、億千年の星霜を経て風や氷河（時代によつては海流に）によつて磨かれ、威く荒く奇異だが、滑らかな柔らかさのある幾何学的な幾多の岩々が、擲たれ積まれ重ねられたかのようにも見え、この縦に長い立方体の山を古代の人工的建造物であるかのように映えさせる。

岩棚が段のように数多あり、所によつては木々を越えて薨が見えていた。

標高 399 m の峻峻な山の頂には神が降臨するとされる磐座と縄文時代の祭祀の跡があり、神彝之眞斗が王都彝玖鷺を築いたと伝承されている。山を囲む濠のような眞神川は岩を砕き、激流の音声轟かす。

龍爪橋を渡った。上下の岩棚を繋ぐ石段を昇る。

いくつか岩棚を渡り、彝之家の屋敷すなわち眞神之大御社に行く
と神前庭を囲む廻廊がある。扁額が掲げられ、「**彝亞咽厨御大御神**
としゆとしゆおそれおそれかしこみかこみれいたてまつります

頓首頓首畏畏惶惶奉礼拝」とあり、その隣には左のごとくに神の
うけひかみくしくすみあけくふかくたがはず
御名がならんでいる。誓約神妙清明甚深不互と記した上で、

あまてらすすめおおみかみ
天照皇大神

頓首頓首畏畏惶惶奉礼拝

おおひるめのむちのかみ
大日靈貴神

頓首頓首畏畏惶惶奉礼拝

あめのみなかぬしのかみ
天之御中主神

頓首頓首畏畏惶惶奉礼拝

北極紫微大帝

頓首頓首畏畏惶惶奉礼拝

北斗真君

頓首頓首畏畏惶惶奉礼拝

そして扁額の左右を衛護する多翼の**彝鬘羅婁神**の浮彫像があった。
眞神斗人の一族が海に囲まれた**蓑之国**に御社を祀った時代、武猛く
荒ぶる一族、平衛ひらえ（古くは鞍社婁）あんしやる家が臣従し、その氏神が彝鬘羅婁
神であった。亞帟輯婁あつしゅうるとも言う。

その平衛家は眞神村の隣、龍吞村りゅうどんに居している。集落の外れの高
台に明治年代に改築された城砦のような赤煉瓦造りの洋館があり、
それが本家邸宅であった。

いまその二階で一人の少女が午睡をしている。恐らくは心地よい
夢でも見ているのであろう。恍惚として深く緩やかな微笑をしてい
るかのように見えた。

「あゝ」

コンガのリズムと邪教的なコーラスが頭の中を何度も旋回してい
る。『Sympathy for the Devil』（The Rolling Stones）だ。悪魔
の嘲笑のようなキース・リチャーズ Keith Richards のギター・ソロ、
1957年製ギブソン・レスポール、ロンドン・サウスウエストに
ある Church Rd のスタジオ、霧の深い 221B Baker Street……
しかしなぜか大きな黄昏とともに想いに浮かぶのはスコットランド
のキャッスル・ロックの上、エディンバラ城 Edinburgh Castle や
懐かしいバグパイプ bagpipe の音、海を渡ってアイルランド Fire

やルーン文字 Runic ケルト十字架。

スカンジナヴィア半島へ飛べばゲルマン民族の雷霆神トール Tor (古ノルド語 Þórr)。昔者莊周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也、不知周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与 (莊子齊物論)。

妄想はカバラ קבלה の生命樹とタロットカード Tarot、古代の聖仙^{リシ}が詠唱するヴェーダ वेद が響く、サンヒター संहिता、ブラーフマナ ब्राह्मण、ウパニシャッド उपनिषद्…ああ……やがて訪れたエクスタシー。

Aaaaaah aaaa……

気持ち  (いイ) …

「わたし」は 生まれた……

生きるって こういうこと だった……のね…

こんなに…あざやか で… vivid…な…こと だった…

なん…て。 ああ、知らなかった。

やバイよ。 Ahaaa…

存在って、やばい。『いま』ってコト。凄い。

すごいリアルだ…

この自由、奔放、天宇蒼穹の百億倍よりも広くてとてつもない解放感が、ああ、極まる……ああ、死んでもいい……くらい……よ

清涼なさやかさ、さわやかな、きよらかさ、とてもしずかで、かろらかで、光の洪水、氾濫、潮^{うしお}……けれど、すごくかろらか、静謐、すごい自由、ああ、何て自由な……身も裂き砕くほど、さやか
かろら、無数の星鑲めた宇宙のように無限に自由に天翔躍^{あまがけおど}るよ。

なんだ……

夢か。

光が瞳孔の水晶体を透過し、網膜に照射しているらしい。どうやらまぶたがひらかれたようだった。

そのように投企したからそのように見えているだつて？ それ
がコペルニクスの転回だつていうのか？ コロンブスの卵のような
発想だと？ あはは、身も蓋もない自己完結でしかないじゃん。マ
マゴトだよ……

わたしたちは何も証明できない、

自動的にそんなことを思考が勝手に考えていた。

そもそも「イミ」っていう看板が他人顔して、そっぽを向いている。イミイミいいいみ意味い味いみ意みIMIイみイみI All are concepts. The meaning is physical presence.....

まるで写本イルミナシオン装飾彩色画。

5

Art Nouveau style のランプ傘に暗鬱な古代の夢、ヨハネの首、ヘロディアの娘の舞踏、ベッドのフットボードに蔦木彫つた、天鵝絨ベルベツトのカーテンのクリムゾン・レッド、マホガニーやウオールナットを使った、華麗でつややかなイタリアン・アンティークチエストの箆筒。

神話だ。幻想……オーブリー・ビアズリー Aubrey Beardsley、ギユスターヴ・モロー Gustave Moreau……

わからない。なにもつかめない。たとえつかんでもつかむがわからない……

尾を咬む原蛇がなすメヴィウスの輪 Möbius loop や無限永遠遁走曲。いる、「わたし」は、この『いま』というここに。世界の中に、かこまれて。

樫材の木彫書棚、古い皮革装丁の洋書、華やかなコーヒー・テール、薔薇色の縹子張りのロココ調猫脚イス、ハンガリー (Magyar Köztársaság というタグが附いている) 産のグース羽毛ダウが詰まった布団、それをくるむシルク・カバー、古代ギリシアの白地技法を模した陶器がならぶメープル材の飾り棚。

寝返りを打つ。ベッドの傍らにある古いガラス窓、窓枠もハンドルも古く、外は雨だった。

我が家の風見鶏と銅葺きの屋根と赤煉瓦とに、烈しく降って霧のように世界を煙けぶらせているらしい。それを見ているテラコッタのよな「わたし」。茫然と、寝乱れ髪いく筋か翳す憂いの双眸ひとみで。

なぜ。

次第にさまざまな断片が収斂、モザイクをなし始め、やがて「いき」が色彩を帯び、イミで記憶を綴る。「わたし」に浸透していく。それらが繋がり、了解が起こる。草木が萌え出ずるよう。理性は自然現象。イオンの流入による電位差。

インパルスという電氣的な発火現象。過ぎ去った日々の記憶が甦よみがえる。

彼女はからだを起こした。

とてもだるい。素足を床に着けた。冷たい。立ち上がって歩く。
鏡の前へ。自分を見る。

「おはよう、エロディヤード Hérodiade※」

※ ヘロデ王の後。彼女の連れ子がサロメ。サロメはヘロデ王の前で舞踊する

褒賞として聖ヨハネの首を望む。しかしそれは母エロディヤードの命で

あったという。

昨晚、サバト的な秘儀参入の衝動に駆られて盛った化粧。それを
落とさないまま、数時間だけうたた寝した顔。

「わたし」を鏡の彼女が眺めていた。

Eyelash へ Colored Contact Lenses が過剰なまでに人工的なハデ
さを持っていて、アンティーク・ジュエリーみたいに見える人。た
とえばシルバーの彫金細工に鏤められたエメラルド、碧玉、孔雀石、
ダイヤ、ラピス、ルビー、サファイア。それらでつくられた、蝶々
か、おしべの長い躑躅つづじのようだ。

時によってはステンドグラスを嵌めた、炎のようなトレサリー（飾り格子）を持つバラ窓のようにも見える。たとえばサン・ドニ修道院
南翼廊のバラ窓のような。

まっ黒な髪。以前は彼氏に気に入られると思って、金髪にしてい
た。いまは濡れたような黒にしている。漆黒だ。少しカールしてい
るのは天然だからしかたがない。自暴自棄に髪を染め変えたが、ず
っと家に籠っているから友だちには見られていない。

染め変えた直後は鏡に映る自分の姿を見て愕然としたものだ。本
当に彼と切れてしまったことを感じて彼女は後悔した。しかし、染
めても染めなくても結果は同じなのだ。事実は人の情に関係なく、
歴然と存在する。人間は無力だ。何もする気になれなかった。しか
しそれは今回が初めてではない。

ずっと前からそうだった。

好きな映画を見たいとか、気に入った服やバックや小物のあるシ
ョップに買いに行きたいとか思わない人。思うと、からだがだるく

なって辛くなる。好きな人に近づくと、動悸が激しくなり（これは誰にでもあることだが）、からだ^{だる}が怠く重く辛く苦しくなり、動けなくなる。何とも言えない気持ち悪く息苦しい懈^{だる}さに見舞われ、体の力が抜ける。

何かを欲して何かをしようとすると、必ずそんな風に体調が悪くなった。医者に行っても、何でもないと言われる類の体調の悪さ。呪縛のようだった。

幼い頃、祖母にかわいがられた時代は幸せだったかもしれない。でも幼稚園は辛かった。疎外と敵意としか感じなかった。人がみんな自分に何の親愛も同情も持たず、ただ非情に利用して捨てようとするかのような疎外の感覚。人が感情のない岩膚のように乾燥して見える。

そのように人を受け入れていないのだから、人から受け容れられるわけがない。容れなかったのが先か、容れられなかったのが先か、どちらか定めがたいが、いずれにしろどこかでこの連鎖を断ち切らなければ永劫に解決はない。

小学生の頃はキモいと言われた。しかし中学生になってから友達もでき、部活や委員会活動など頑張ったが、修学旅行でグループになつてくれる級友がいないことに愕然とした。受験間近の三年生の頃は家に独りでいるのがほとんどになっていた……

なぜだろう。いつもただじっと耐えていた。高校生になってからは学級委員でもないのに生徒会に代理で出席して毎日夜遅くまで文化祭の準備をして生徒会からもらったお金が足りなくて誰にも言わず、自分のお小遣いからお金を出してで買い足して毎日夜遅くまで頑張つて挙句の果てに「あいつを使ってやったのさ」と学級委員だった浅沼や他のクラスメートに言われ……家では母親の手伝いをしても妹の方が可愛がられ、妹を私立眞神高校に入学させるからイユノは公立高でいいって、夜、両親が話し合っているのを聞いても、黙って耐えていたのは……なぜだろう。何でそうなのか。

わからない。

しかし彝^{いの}之娑斗^{のさと}獅と付き合っていた間だけは、少しだけ違っていた。

無理をしていたことは確かだが、それでもできた。からだが動いた。衝き動かされるように。いまはまた戻ってしまったが。

鏡を見ながら、こどものころからの口癖が無意識に囁くように唇から洩れる、

わたし、しあわせになれない。

神さまがそう決めた。

しかたない。

どうしようもない。

人は運命には勝てない。

そうよ、しょうがないじゃん。言っても何の足しにもならない。しかし、言わなければつづれる。精神衛生学上の問題だが、判断が間違っていたとしたって大した問題じゃない。彼女はそう考えている。どうせ、みんな最後は死んじやうから。人類だって結局、滅びちやうんだから、つて。

「そう。もう、我慢なんてしない。何も気にしない。誰もわたしのことなんか気にしてくれないんだから。わたしも気にしない。これからは自由になる。すべてかなぐり捨てる。運命の拘束を引き裂いて、ぶつちぎって呪詛から解放されるんだ。

氣遣ってばかりで狭い世界に閉じ込められていた。もう行き場がなくなってしまった。いつも、いつも憂鬱で、かすかな希望が必ず裏切られる世界。希望や安堵が、絶対、次の瞬間に裏切られる油断のできない世界。

少し良くなったと思ったら、その後には必ず前より酷くなっている世界。血も涙もない非情の世界。情状酌量なんてない。お構いなしの世界、不幸な人がようやくたどり着いた洲にすぎり、ほっと一息吐いたのに、またこれでもかと災禍が畳みかける世界。

絶対に信頼のできない世界。幸福の後に絶対不幸が来る世界。

もううんざりだわ」

彼女は窓の前に立ち、降る雨を睥睨するように見つめる。

ふん。

現実を殺してやる。

もう哀しみたくない。でもそう思った瞬間に彼女の双眸に涙があふれ、止まらなくなった。

出るなら勝手に出ればいいんだわ。知ったこっちゃない。てめえらの思いどおりにやさせない。そうよ。勝手にあふれなさい。この雨のように。この烈しい雨のように。雨、雨、雨、雨！

ああ、もしこれが涙雨なら滂沱の涙つてとこね。彼女はつぶやいた、贅沢だわ、と。

2 静謐なる予兆

『赤い龍 *Le Dragon Rouge*』や『グラン・グリモワール *Le Grand Grimoire*』と呼ばれる奥義書、偉大な教書において地獄の支配者と呼ばれる三大魔王、ルシフェル *Lucifer* やベルゼブュート *Belzébut* やアスタロト *Astaroth* に次ぐ上級精霊にして地獄の宰相であるリュシフュージェ・ロフォカル *Lucifuge Rofocale* に^{ヌース}叡智^{わけみ}*vous*を分御^{たま}魂^{たま}してくれるように祈ったが、ムダに終わったようだ。

「でもこの世に神秘の力があると信じている。そうでなければ宇宙がこのように構成されるはずがない。宇宙は一つの生命のようにベクトルを持っている。神の意志がなければ、どうしてこうなるだろうか。

しかしそれは人間風情の身勝手な考えかもしれない」

イユノは再びもの憂げにゆっくりとしなり崩れるように、ベッドに横たわった。スマートフォンをいじって偶然ユーチューブが開いた。前回「葬之」で検索したデータが残っていて、なぜか葬之イタルの動画が再生を始めた。

むろん以前に娑斗獅の動画を見るために使ったキーワードだ。なぜイタルの方が……

動画はスタジオでのライブだった。演奏していたのは彼のラストライブでも演奏された曲『豪奢なる修羅の戯』だ。呪詛のような、狂気に満ちた邪教的な歌。以前にも見たことがある、偶然……

「縁起でもない」

そう舌打ちしてすぐに消した。言ってしまったから酷いことを言ったと思い少し後悔する。彼は死んでしまったのだから。そんなことを言うべきではなかった。しかし娑斗獅と同じ彝之一族の人間でもある。彝之家、イユノの胸にいまの自分の個人感情と先祖以来の遺伝子に刻まれた感情が交ざり、複雑な翳りとなってよぎる。

彝之イタル。非業の死が彼の伝説性をさらに高めてしまったことは疑う余地がない。眞神という土地にふさわしい死だった。娑斗獅もそのパフォーマンスに大いに影響を受けていたが、それも当然のことと言える。

人はなぜ何かに執着し、彗星のように燃え散りながら狂おしく疾駆するのだろうかと思いを廻らせるもすぐに首を振り、

「いや、そんなこと、どうだっていい。戯言だ。力が欲しい。現実的な力が。」

いくら理念を掲げたって、現実を動かさなくちゃ虚しい。わたしは無力。復讐したい。

Λόγος(ロゴス)とCogito(コギト)の崩壊、“*Cogito, ergo sum*”……

あはは、解体、分裂、虚妄化。望むところよ。悪魔主義になって、魔的なものに惹かれ、この世のすべてを猜疑し、拒みたい。

どうせ元々すべてにネガティブだったじゃん。なんも変わらんよ。性格悪いし。シカトされ、叩かれるのがデフォdefault(初期設定値、標準値)だし「笑」。学校行くと廊下で溜まっている奴らがわたしを揶揄する。だるいから無視するけどそれが奴らを執拗にさせる。メンドクセー。

しらふねたける
白舟茸柳の女バージョンって言われているし。あいつみたく根暗な気弱じゃないけど。ま、変挺りんなトコは似ているかもしれないが。

けど娑斗獅といたときだけ、彼の悪魔性によって封印が解かれ、自由になっていた。

でも終わった。それも奪われた。何だったの、あの女。すべてがたくらみに思えてくる。だいたい葦原シノブ^{あしはら}って、以前はそんなに嫌な女じゃなかった。友達だった。嫌な女って言えば、赤門アカネ^{あかかど}だった。

そうだ。彼女だったはずだ。いつからどうなってしまったのか。

でもいまもアカネは嫌いだ。そもそも見た眼がもうわたしに拒絶反応を起こさせる。赤いカーリーヘアで、日本人なのに雀斑^{そばかす}だらけで、痩せっぽちで、ネクタイが大きなフリフリで、ミニスカで、メイクが吊り眼の猫系小悪魔で。口が大きくて騒がしい女。スゲー嫌いなタイプ。

だいたい赤門家って、赤門戸町の足軽雑兵の家柄だ。はっきり言って平衡家より格下だ。武門の家の頭領であるわたしたちにしてみれば従僕みたいなもんだ。

あーあ、やっぱし、わたし、性格悪いかな、こんな言い方して。でも、アカネだって、サイトでわたしのこと馬鹿にしていたし、性格悪いとか、ブサイクとか、どんだけアタマ悪^{ワル}っ？とか、わたしの発言取り上げて「コレわないよねー？」とか…あームカつく。友達少ないのは性格のせいもあるけど、アカネのせいもある。

バカとかウザイとか言われるから、みんなそんな感じにわたしのことを想って。

マジで嫌なことばっかし。

あーあ。

自分になりたい。現実になりたい。力が欲しい。現実を動かせるリアルな自分になりたい。

わたしじゃない。何かが違う。

幼虫がさなぎになってさなぎが蝶々になるように、自分を脱却したい。蛇が脱皮するように解脱したい。力が欲しい、力は、FORCEは、いったい、どこにあるのか。

娑斗獅といたときは、喪失の不安にいつもつきまとわれながらも、特別な力を得ていた。そう、自分の **FORCE** を感じられていた。

それだけ彼が悪魔のようなカリスマ性のある男だったってことが悔しいし、喪えないものを喪ってしまったみたいに辛いよ。闇雲な執著だわ、未練よ、でも止められない」

イユノの悲劇は先週末に起こった。

娑斗獅の率いるバンド ヘビー マテリアル **Heavy material** はかつてこの地域で伝説的な存在だったバンド ザ クワドルブル オフ ヴイ **the quadruple of V** なきあと、リザード **RZD** とならんで、まがみ 眞神ではカリスマ的なバンドだった。

ヒップポップ風のサンプリングや打ち込みを、重金属的な低音になるように烈しく破壊的にひずませた演奏に乗せ、娑斗獅がステージで自己破滅的に シャウト **shout** する。

彼がそういう歌い方するのは **the quadruple of V** のイタルの影響だ。

ライブハウスの前に飛鳥タロトが立っていた。あすか 白く髪を染めて眼の細いとがった顎の男子。安房市に住み、イユノの通う県立蒼龍高等学校の同級生。いつも冷たい無表情なイメージがある。

娑斗獅と腕を組んでいたイユノに、

「よ。」

仲いいな、相変わらず。ふ」

皮肉な微笑。

イユノは応えなかった。『そうでもないのよ』

それよりもその奥に控えていた女が気になる。その子は予想に反せず飛び出てきた。

「さとしー、がんばってねー」

娑斗獅は顧みもせず、返事もなかった。

その土曜の夜も、呪詛のような娑斗獅の声が振りしぼられ、天平あまひら草鞋わらじの民族っぽいサイケなギターが絡んでいた。

このどろどろな感じに対して、無機質な打ち込みとモザイクのよ
うなサンプリングを、「教授」あまの天之レイがP Cで淡々と展開する。炎ほの
情佐衛門じょうざえもんのドラミングは高性能なマシンのようだった。たとえばF
1マシンの非情なエンジンのように。

なぎくさまちかみなかす
薙久なぎく 薙町なぎまち 神中洲かみなかすのライブハウス ブラウンシュガー
Brown Sugar。

彼女はオーディエンスにまがり、誇らしい気持ちでそれを見ている。「あれがわたしの彼氏なのよ」という感じで。

けれどそのときもいつもの不安は消えていなかった。まるで不安を抱かないことが罪悪であるかのように、それを絶やすことができない。

そんな状態が不幸を呼び寄せているんじゃないかと思いつながら、止められない。ほとんど性癖的な喪失への欲望が彼女の中に渦巻いているかのようにだった。

しかもその日はまったくの妄想じゃなくて、具体性があつたからなおさらだ。

すなわち時折周りを見まわしたのは、娑斗獅にまわりつくあの女を気にしてのことであつた。

いない。

だがそれが逆に不安にさせる。

なぜ。だって、いないはずない。

現に来たとき入口で待ち伏せしていたじゃないか。いつものように懲りもせず図々しく声をかけてきたし！

でも、今日の娑斗獅は機嫌が悪くて、そんなもの眼にも留めていない。

サウンドの調整がうまくいっていなかったし、バンドの意見も割れていたし、彼のやりたいことがうまく伝わらないみたいだったし。

『それも知らないでバカな女だ』

イユノは内心わら嗤っていたが、実はそれほど余裕でもなかった。

彼女も娑斗獅と口をきいていなかったのだ。いつものように腕を組んで会場入りしていても。

その空気を感じたのか、一瞬で女の眼がさらに強く輝いた。

「娑斗獅―っ、あなたは神よ、神だわ！」

頭おかしいんじゃない？ 無言でそうつぶやきながらイユノは娑斗獅を引っ張るようにさっさと通り過ぎたものだ。

ムカつく女。

いつものあの女はキラキラ輝くあの瞳、紅潮した頬で、まるで娑斗獅がすでに自分の彼氏になっているかのような、勝利感に満ちあふれた表情やしぐさをする。それが生命力に満ちて、とても魅力的であるように、イユノには思えた。

彼女には絶対ないものだった。

見ため癒し系なのに、一通りじゃない、したたかな女。あしはら葦原シノブ。同じく県立蒼龍高校の二年生。きつと、帰りは帰りで出待ちしているにちがいない。

だからいまこの会場にいないはずがないのだ。

イユノはさらに用心深く見まわした。

これで何度めの確認だろう。でも今日は特に油断ができない気がしていた。勘だ。だから心はステージを見ていない。演奏も何も聞こえていない。

『そうよ、嫉妬よ。』

でもそれが愛だとわたしは思う。

恋愛は親子の愛じゃない。自分だけのものにしたいと思うのが、とうぜんだ。

嫉妬のない愛なんて愛じゃないわ！』

オーディエンスの歓声が遠いこだまのように聞こえる。

胸騒ぎがするのは、なぜだろう。どきどきしてしかたがない。

まさか。でもまさかそんなはずはない。

しかしそう思った瞬間には人をかき分けてステージわきへ向かっていた。

マーシャル Marshall 社製のアンプを積んだ（それは実用というよりはオブジェだった）裏が待機場や楽屋のようになっているスペースだった。イユノはそこへ廻った。シノブがいた。

「何であんたがここにいるのよ！」

激しく叫んだ。

冷静に考えれば、シノブがいちゃいけないルールなんてどこにもないが、そんなの関係ない。理性がぶっ飛んでいた。

「あれ、イユノ、あんたこそ何でここにいないの？」

カノジョでしょー？ もう別れちゃった？（笑）」

「てめー」

全身から焰が上がるような感覚があった。初めて感じる。

イユノはこういう情念的なタイプじゃなかった。シャイではないが、ナルシステイックで、もの怖じするタイプだった。目立ちたがり屋で注目される行為や服飾や言葉を好むけど、長くそれに耐えられず、人前には出たがらず、自分からは行動しないタイプだった。しかし追いつめられた獣となって逆上していた。

凄まじい力が全身にたちまち漲ってあふれ、空間を満たし、周囲の壁や物を破壊するような感覚があつて、心の片隅で少し驚いている。

そのときのシノブの反応は奇妙なものだった。

彼女は両眼を睜みひらいていた。それは驚愕でも恐怖でもなかった。

疑り深い、陰悪な、それでいて予想していたものが見つかったかのような眼つきであった。

「イユノ、あんたって、やっぱり……」

「えっ!？」

けど、そのとき一際ひととき高い歓声と拍手が。演奏が終わったのだ。イユノたちの言葉はかき消される。髪の毛の長い体の大きな男が咆哮のように叫んだ。

「すげー、まるでイタルだ！」

誰だろう、身長が2メートルくらいあるんじゃないか。イユノは

見たことがあるような気がした。しかも『イタル』って……

実物は見たことはないけど、ユーチューブの動画で見たことがあるから自動再生的に映像が生々しく脳裏に映写される。『イタルだなんて。

彼はイタルほど非現実的な存在じゃないわ。娑斗獅はもっと生身の存在よ。イタルは、生身の、現実の人間じゃないわ。彼は凄過ぎた。とても同じ考えや言葉を使っていたとは思えない』

そう考えながら、ふと不思議に思う、

『あれ、どうしたのかしら、わたし。イタルのこと考えている。なぜ？ この非常事態の真っ最中に!?!』

自分でもよくわからない。

娑斗獅たちがステージからこっちへ降りて来た。

するとシノブは突然、モードを切り替えたかのように表情をつくり変え、娑斗獅に飛びつく。わざとイユノを盗み見しながら！

「すごい、娑斗獅、超かっこ良過ぎ、ちよーヤバかったよー、最高！」

クールな顔のまま、汗まみれの娑斗獅は何もいわず、シノブの髪をつかんでキス！

イユノは愕然とし、声にならない声で、

「う、うそ……マジありえない」

だが、娑斗獅はそのままシノブを突き離して、イユノも無視して、バンドのメンバーと行ってしまった。

「娑斗獅——」

イユノは追いつがったが、会場の外であきらめた。

『いまはだめだわ。わたしにはよくわかっているはずじゃない。いら立っているのよ。ステージにも満足してないし。』

こういうときは少しの間、そっとしておいたほうがいい』

9時の終電で家に向かう。独り龍吞村の家に着いて午前1時まで我慢してから、娑斗獅にメールした。30分待って返信がないので、電話した。

出た。

「何だよ」

「うん。何でもないけど、娑斗獅、どうしてるかなって思っ

「別に」

「いまどこ？ もちろん、家でしょ？」

女の声がした。えっ？

「ねー、さとしー、イユノでしょ？ あたり？（笑）」

シノブ！ イユノの全身の血の気が引いた。

「俺は家じゃない。

悪いが、いま、めんどくせえ話は聞く気がしない。

そのうち話すさ。おまえが俺と話す気があればな。ふ」

切られた。

ここまで決定的なことはいままでなかったが、これに近い状況が以前も何度かあった。彼は嵐のような男なのだ。そういう男を好きになったからしかたない。イユノはそう思おうと努力した。

けど心は張り裂けそうだった。とても堪えられない。

結果的に、イユノは自分の本当の気持ちとはまったく逆のことをした。別れたくないから、失うことができないから、逆上の早く結論をつけたがる。そんな破滅的な自暴自棄な感情。

「別れよう」

日曜の朝、メールでそう送ったのだ。

予想どおり「わかった。Ok」という返信があった。むろん逆の返答を求めていたが、そんなはずがないこともわかっていた。わかっていたけど慟哭した。

殺したいという怒りすら、どす黒い噴煙のように込み上げる。かと思えば哀しみにバラバラに崩れる。胸が苦しい。憤激、悲嘆、怨念、憎悪、絶望に襲われる。

月曜、熱があると親に嘘をついて学校を休み、ベッドの上で七転八倒していた。部屋にいてもまぎらわすものが何もなく、つらい。

何もできない。どこにも行きたくない。誰にも会いたくない。

ちくしょー。

くだらねー。

そう思おうと努力した。相変わらず感情は他者で、一向にわたしの言うことを聞かない。

何で娑斗獅なんか好きになったんだろう。彼に執著しなくちゃいけない理由なんかあったのだろうか。どうして恋愛感情って高まっちゃうんだ！　なぜ彼なの？　なぜ彼じゃなきゃいけなかったの？　まっとうに考えると自分でもよく解らない。

彝之家だから？

私立眞神高等学校だから？

そう思おうとした。そうすれば気が楽になる、ような気がしたから。彝之家も私立眞神もこの眞神郡では神的な存在だ。ちなみにバンドは四人とも私立眞神校の二年生だった。

眞神という名の高校は県立眞神もあり、そこも県内有数の進学校だけど、私立はこの歴史ある地域では特別の存在だ。

私立眞神の理事長、彝^い之^の爲^い弓^て阜^ふ飛^ひ也^やは、眞神一族の族長^{キング}である彝^い之家の第五式四代当主だ。彝之家は太古の昔、眞神の豪族だった家柄で、あのイタルも彝之の姓を持つ。むろん、娑斗獅もだ。

一族は西暦五八八年に火々禽^{ほほとり}の柵^{さく}の戦いで大和朝廷に敗れるまではその支配を受けず、蝦夷の強者であった。かつて眞神郡（眞神村・畝邨村・龍呑村・龜鹽村・薙久簗町の四村一町）は国家だった。

一言でいってしまえば、私立眞神高校は学校法人として認定された表向きの目的とは別に、眞神一族の精神を世に継ぐことを眞の目的として設立されていた。

だから、眞神郡の眞のエリートたちが集まっていた。よその人には、嘘みたいに聞こえる話だが、地元民の意識は高く、進学や就職に有利な他校を志望する者など、実際、皆無だった。若者の村離れも皆無だ。古来富裕の地に就職の憂いなどない。みんな純粋に眞神のために私立眞神高を最高峰とした。イユノだって、優秀だったら、私立眞神に行きたかったのである。

眞神人は自分たちを眞神斗人^{まがみとうじん}という。大和と斗^{たたか}ったからだ。

イユノの平衛家^{ひらえ}だって、彝之家^{このえ}の近衛（君主を護衛するために、君主に直属する軍隊）だった一門で、聖域である眞神村を護るために、眞神郡の入口である龍^{りゅう}呑^{どん}村に歴史的に居をかまえている。

彝之家のために。

イユノが最初に娑斗獅と会ったのは、まだ中学生のころ、郡部のサッカー部交流試合のときだ。そのときはイユノの通う赤龍中学校が会場だった。

薙久簀第二中学校の女子生徒が騒ぐ声が聞こえる。それが妙にイユノに聞かせるような感じで騒いでいるように響いた。「ほら、あの^{ひと}、ほら」 いま思えばその騒ぎの中に葦原シノブがいたように思う。イユノは振り向く。

眼がクギづけになった。

十一月の薄く明晰な太陽光に、神々しい少年、彝之娑斗獅。

金色の長髪で誰からも咎められず、高貴で残虐で、美しくしなやかな獣のような男子。

水道水を蛇口から首をかたむけて飲むとき、喉を伝わる水の流れに魅せられたイユノはそのときからもう、恋に堕ちていた。

しかし赤門戸町中の生徒男女数人が、

「大したことないよ、あんなのさ」「おれの方がいけてるぜ」「言ってるじゃねーよ」「カッコだけだわ」

イユノの耳には入らなかった。彼女の魂はもうロックされていたのである。

結局、中二時代に会った（見た）のは、それだけだった。名前も知らなかった。

次に会ったのは路線バスの中だ。

眞神郡の南、安房市は人口20万人で、イユノたちにとっては都会だ。

中三になって初めて友達だけで出かけた。ざわめく夏の市街地。汗ばむTシャツ。ショップで服を見て、プリクラして、アイスクリ

ーム食べて午後、偶然、薙久簗二中の女子グループと一緒にになり、仲良く盛り上がった。イユノは娑斗獅を思い出し、運命を感じている。捻くれ者のはずのイユノがあるときだけは自身呆れるくらい単純な女の子になっていた。

「彼、やばいよねー」

「名前とか知りたい、シノブちゃん、知らない？」

「彘之だよ、彘之娑斗獅！」

娑斗獅：：イユノの胸に熱いものが迸った。具体的な人物として、存在に触れたような気がして興奮を覚える。

「ねえ、もう帰った方がいいんじゃない？ わたしたちは近いけどさ」

帰路に着くため、安房駅に向かうバスに乗ったとき、途中のバス停から娑斗獅が入って来た。

イユノは動揺した。運命だとさらに強く感じた。少し前まではしゃいでいたのに急に無口になってしまう。

彼はとても大人びて見えた。

杜もりと山と水田と神社しかないところに住んでいるのに、とても都会的な感じがする。流行のファッションもキマっていて、自然だ。服に着られている感じなんかなくて、もう昔から都会で遊んでいる人みたいに見えた。

わずか1年で娑斗獅はすぐ変わってしまった。そんな焦りがイユノの心を烈しく責めた。

声なんかかけられるわけない。だいたい、彼もイユノを憶えていない、というか、当時はまだ彼女が一方的に見知っていただけで、娑斗獅がイユノを知るはずがなかった。

安房駅前に着くと娑斗獅が降りる。イユノたちも。友達を置いてついて行きたい気持ちを抑えられなかった。降りたところに赤門戸町中の女子が立っていた。

「くだらない奴だよ、あんなのどこがいいの？」

イユノは驚いてその方を見た。『何で見ず知らずのわたしにそんな

なことを言うの？ 何でわたしが彼を意識しているのがわかるの？』
その顔に見覚えがあった。サッカー部の交流試合にいた子に違いない。いったい、なぜ。

次に会ったのは高校受検であった。

眞神村にある私立眞神だ。イユノはそのとき初めて眞神村に行った。先祖来崇敬の地でありながらなぜか一度も行っていないのだ。嫌だったわけじゃない。機会がなかった。親は行っていたし、祖父母や親戚たちも、とうぜん行っていたのだが。

眞神鉄道は単線で、1車両しかない。

無人で茅葺の眞神駅に降り立ったとき、ふしぎな、なつかしさを感じた。

切ない感じ。

何だろう。

何か、とても古い薫りがからだの奥からわき上がるような感じだった。歴史の馨だ。自分で勝手にそう思った。

駅からは歩くしかない。稲のない寒い田んぼの中の細い路を行く。水平な田地に島のように人家が点在する。こんもりもり上がった丘がかこむ。

そんな中に私立眞神は塀も建物も敷地も左右均等、整然として聳えるような感じだった。校舎はまるでルーブル宮のようだ。実際、マンサール屋根もあった。ただ、大きく異なるのは、四方に高く尖った（ゴシック様式の教会建築のような）塔があったことだ。それぞれに鐘楼があり、そのとき高らかに鳴った。真理の殿堂。

イユノ、急に動悸が激しくなる。

正門の前、娑斗獅が立って男の子たちと話しこんでいた。なぜか（いや、そんなにふしぎなことでもないけど）彼と視線が合う。鋭く、深く、さまざまな意味をたたえたまなざし。伶俐に鋭くて、妖しくて、まるで蜥蜴みたいだった。けれども光の輝きのような皮膚に、生命の躍動を孕み、なめらかな、いまだ未熟の青さを残した筋肉の発達が、少年らしい、生々しい美しさを持っている。陶醉の潮が押

し寄せた。疼きとともに、イユノは意識が遠のくかのように感じる……

だがそれだけだった。ほんとうに会ったのは高一の夏だ。

イユノは^{ハイパーセンシティヴィティ} ^{ハイプス} **Hypersensitivity (Hyps)** というユニットを友だちと結

成した。

娑斗獅が神中洲の **Brown sugar** で活動しているという話を聞いたからである。その段に至って、イユノは初めて現実的な人物として娑斗獅を見知った。

そうなるともう止められない。

具体的なことがわかると、実現に近づく気がするからだろう。向かって駆り立てられる。

ライブハウスに行くようになった。かつてのイユノからは考えられない。今までそんなところに足を踏み入れたことはなかった。自分でも驚くばかりだった。

そして翌日には、もう **Hyps** の話を盛り上げ、聖子とユキを巻き込んでいたのである。

彼女にしては奇跡のような電撃行動だった。けれど、娑斗獅にからむために友だちをだましたも同然だった。当時のイユノは何かに憑かれていたのである。

活動は主にネット上。**Hypersensitivity** 名義でブログを立ち上げ、作曲ソフトを使って作ったオリジナル曲をミニブログにアップしたり、聖子がキーボードやシーケンサーやリズムボックスを使い、ユキとイユノがギター、ボーカル・パートは三人で、というスタイルで動画をアップしたり、ふつうに **SNS** に ^{ハイプセン} **Hypsen** の名で活動報告や考えや日常の感じたことなんか書き込んだりした。

三人で月一くらい ^{ブラッシュ} **Brosug** に行った。^{ヘビマテ} **Hymate** のライブ・レポートなんかもブログや **SNS** に書き込んだ。

イユノはサイケなデコレーション（イラストとか、絵文字とか、などなど）を盛った詩をよく **SNS** に載せた。

貴方の眸ひとみは蒼穹のような海 永遠の絶望

モザイクのように

青 蒼 藍 紺 碧 コバルト・ブルー 水色

ラピス・カラー azur Turquoise blue

Jasper blue Sapphire blue

それらが

幾層にも透いて重なり

奥の奥 燐火のように 燦めき

星のような耀きの深さ 明晰さの深淵

深く深く 私を誘い 沈める……海

彼女たちのユニットはステージに立つことができるようなレベルにはなかったけど、少しずつ知られ始めた。イユノのナルシストな性格のせいで誹謗中傷っぽい書き込みをかなりされたが、ネットの常だし、イユノには目的があつて、それに向かつて心がいつばいだったので大して気にならない。

特に一人、いつも激しく叩く奴がいた。それがあの赤門戸町中の彼女だということはすぐにわかった。イユノと同じ蒼龍高に進学して来たからだ。赤門アカネはそれを隠そうとしなかった。アカネ、というハンドル・ネームだった。しかしフォローしてくれる人もいた。それはシノブだった。応援してるよ、と直接電話をくれたので、それが彼女とわかったのである。シノブとは電話番号を交換していた。

いずれにせよ、ネットの常で叩く書き込みの方が圧倒的に多い。聖子がよく言っていた。

「イユノって、意外に強いよねー。わたしさー、まじへこんだよー」
「そうでもないけど。わたしたちの目指すアートのために、がんばろーよ」

ある日、奇跡が起こり、娑斗獅からメールが来た。

イユノの知り合いからアドレスを聞いて送ってきたらしい。その

知り合いが誰だかはわからなかった。でも、そのときは、うれしさと怖れとで誰であろうが気にならなかった。ともかく信じられない気持ちだった。舞い上がった。

絶対そうなるっていう確信が心のどこかにあったけど、ほんとうにそうなるとは思っていなかった。矛盾した言い方だけど、それが当時のイユノの正直な気持ちだった。

メールをやり取りし、2日後、待ち合わせて会った。

わずか2日間も、イユノには短い時間ではなかった。彼女は幸福と絶望を繰り返した。

イユノは48時間で200回ぐらいメールした。イユノが7、8回メールするのに対し、娑斗獅の方は短いメールが1回あるかないかぐらいのペースだった。

初めて向かい合ったとき、イユノはほとんど話ができなかった。彼は魅力的な異教の神のようだった。けだるく、懶惰で、冷たく、強く、美しく、韜晦的だった。まぶし過ぎた。

わたしもこういうふうになりたい、そう真剣に思った。

彼にふさわしい女になりたいというより、ストレートな羨望だった。ある意味、嫉妬であり、ライバル心だ。

初デートは最悪でほとんどしゃべることができなかった。まあ、よくあることだが。絶対嫌われたと思っていた。

シノブがメールで大丈夫だよ、絶対うまくいくからと励ましてくれた。

その日の夜にはもう、ヘビマテの娑斗獅とハイプセンのイユノがデートしたらしいという書き込みがバンド系スレッドにあり、驚かされるが、あの女、アカネだろうか、けれどバンドのメンバー以外でデートのことを知っているのはシノブだけのはずなのに。

しかし二重に落ち込んでいたその翌日、彼からイユノの詩を曲にしたいという内容のメールが来る。

イユノは狂喜乱舞した。人生最良の日々だった。

「夢見てんじゃねーよ」って書き込みがその同じ日、デート情報の

後に書き込まれていたことに気がついたのは何日も後になってからである。

それ以来、ライブはもちろん、スタジオの練習にも常に一緒にいるようになった。

しかしわずか二カ月で終わったのである。

「もともと無理だし、似合わないとは思っていたよ。人間ってさー、自分に都合のいい方を信じたい気持ちが必要ある。

はっきり言って、わたし、夢見てたんだ。けど、それがわかったって、つらさは癒やされも、やわらぎもしない」

娑斗獅に会いたい。もちろんそれが本音だ。手が何度もスマートフォンをにぎるけれど連絡することはできなかった。いや、二、三度、かけた。ワンコール鳴るか鳴らないかぐらいで切った。

一日に何度も哭いたが、六日間で、娑斗獅への怒りは収束を見せ始めていた。

だがシノブへの憎悪は熾烈なままだ。憤りと怨みが身体を突き破って狂笑の絶叫をしながら、炎となって迸るように天空を翔り奔りそうなくらいだった。

シノブは味方のはずであった。きっと、そんなものは色恋の抗争の前では無意味なものだったのだろう。恋情は人間を簡単に変え、追い込むから・・・

金曜日の今日、このままベッドから出なければ1週間、学校に行かなかったことになる。

だから？　それがどうしたっての？！　So What!!

イユノは寝返りを打った。すでに10時だし、土砂降りだし、これから学校へ行くこうなんて気はさらさらない。眠りたい。眠れない。しかしいつしかイユノは夢に墜ちた。

3 懶惰

古い建築の中だった。獅子の頭と腕、鷲の脚、背に四枚の翼を生

やし、蠍の尾を持った魔神パズズが燭台を手にイユノを案内していた。暗い廊下。床も壁も干乾煉瓦のようだった。恐らくここはジッグラトなんだ。彼女はそう確信していた。

「どうぞ、こちらです」

一つの入り口を指す。不思議な白い光が洩れていた。イユノはうなずいて惶れもなく進み入る。

いたのはイタルだった。

背もたれが5メートルもある直角の木の椅子に坐っている。蒼白で、表情のない、まさしく死者の顔だった。

v v wのイタル。十七歳で死んだ眞神の伝説のカリスマだ。

直接に彼と会ったことはないが、動画や画像で何度も見ているの
ですぐにわかる。いや、たとえそうでなくても彼であることはわかつたに違いない。その異様な雰囲気は彼でしかありえない何かを靄のように漂わせていた。

血の気のない皮膚が乾いている。双眸も虚ろで生命感がなく、どこも見えていない。

白い炎に包まれて黄金の光輪に荘厳され、眞実のように、存在の眞髓のように、どんな存在者よりもリアルに、鮮やかに、vividに、眞に事実に存在していた。彼女の感覚にじかに実存する。

イユノは恍惚とした。

するとすうつとしたものが体に入って来る。見えない手のようなものが、心や身体の中をまさぐる。自分の存在を象る^{かたち}“形状”が解体される。

開放され、解放されるような感じだった。

イユノの解体とともにイタルの姿も次第に透明になり、消えていく。やがて見えなくなった。

何の感覚もないまま、イユノは薄絹のようにふわりと浮く。そよ風にたゆたうよう、スローモーションで舞いながら軽やかに。次第に高く。霞のような低い雲を超え、やがて海のように続くまぶしくまっ白な雲を超え、さらに高い孤雲を超え、それらの雲が小さく見

えるほど空気の薄い、コバルト・ブルーの、音のない、風の強い、成層圏の涯の中空に立っていた。

体が火照って熱くなっている。

足場がないことが凄く怖かったが、神の高みにいるかのような崇高な気持ちになっていた。

消えたはずのイタルも、いつの間にかこの高みに来ていた。

蒼古の歴史のような眼差し、微動もしない。と言うより巨石のように聳えて不動の眸。人間じゃない、イユノはそう思った。古代の神のようだと思った。逝にしへの古き者たちに通ずるような。

偉大なる龍の背骨のような峯々や、深き苔の生す古木や、山を削り平野を悠々と行く大河のように、人間の言語ではない思考、論理ではない哲学であった。

知性は必ずしもロゴス（論理や言葉）ではない。木石の知性は人間の知性とは拡張子が異なるため、あたかも存在しないかのように見えるが、だからと言って非存在であるということにはならない。

むしろ人間の論理や言葉ではない方が、現実的な、すなわち現実に関与し、現実を動かし得る力のような気がしてならない。

それって……………急に体が重くなり、眼に見えない暗黒の巨大な渦に呑み込まれるように、凄まじい勢いで轟音とともに奈落へ墜ちるよう、吸い込まれ……………

眼を覚ました。まだ雨は激しいが、雲がやや薄くなり、黄金色が茜を帯びて深く明るく、黄昏の時刻であることを微かに示唆していた。世界の全てが魔法に見えた。未知の世界に佇んでいる気がした。

翌日、土曜の朝、イユノはベッドを出る。

何をするのかわかっていないけれども、気持ちははつきりしていた。決然と歩む。

曇っていたが、雨は霧のように柔らかい。彼女は満艦飾に装身具をつけ、一番気に入っているパフュームをつけ、レインコートと傘

で外に出た。

家は村から少し離れた高台にある。見渡す。足下に静かに佇み甕をならべる龍呑村の集落。そのの向こうに古街道が大地に伸びている。

眞神街道は脇にいくつも支道を伸ばすが、そのうちの一つがここ龍呑村のメイン・ストリートへと到る道であり、龍呑神社へと繋がっていた。

街道から分岐してこの龍呑門前通りに繋がる支道の入口には楠の大木と道祖神さえのかみがあり、支道は檜かしがな樺なら檜やきくすひのき榎しいこ椿ぶし辛夷まつ松を従え、やがて黒い石畳の参道の路になる。

路の両側には家々が瓦屋根をならべ、くつついていた。すべての家屋は町屋造りのように路に面した格子の玄関を入ると、通り庭という道のような土間があり、途中に坪庭という採光・通風のためのスペースをおきながら、裏庭へと続いている。

門前通りが終わると鬱蒼とした山の方へと向かう道が十数mあり、龍呑神社の正面に突きあたってT字路になっていた。

そこを右へ行けば坂があり、いま彼女の立つ平衛家の洋館に着く。左へ行けば山越え谷超えて眞神まがみの神域へと続く。

イユノはその坂を下って、龍呑村へ向かう冬枯れの木々の道を歩いた。参道まで下りると、右折して境内へ向かった。雨に濡れた櫺は黒くて神秘的だ。濡れた石畳。

心を癒やす何かがある。

狛犬の代わりに龍神が立つ。鳥居には火の鳥と龍が身を構えている。それは遠く大和朝廷をにらんでいた時代の名残とも謂われている。苔生して朽ち毀れた石段、その上は大木の小径、御神木と言われる老杉があり、本殿に行き着く前に、切妻妻入春日造の小さな社がある。修羅が祀られていた。

そもそも仏道の神であるが、ここ眞神ではこんなことは珍しくない。

仏教では非天悪鬼とされる修羅も眞神では斗神だ。イユノの家の

神棚に祀られている神も修羅だ。彝之を護る修羅。いしゅらるのかみ彝竈羅婁神。

イユノは石段を上がる。修羅斗神社の前に立つ。外陣も内陣も開扉され、辰砂朱丹に塗られた修羅像が見える。

わたしの神だ。イユノはそうつぶやいた。

わたしの……………

そして護るべきは彝之家。

しかしいまのわたしには彝之家は鬼門のようになってしまった。

ごめんなさい、ご先祖さま。

それにしても、何て雨の多い2月……今年は龍神が暴れているのかしら……世界の脈拍を感じる。

龍吞神社は眞神を護る龍の臥する処。龍神の性は水。雨の神でもある。雨のふさわしい土地。イユノにとって雨は心を癒やし、親しく優しいものだ。唇にそつと落ちる水滴を、雨のkissのように感じる。

境内には大樹が鬱蒼たる陰翳、周囲にその原生の姿を留める。杜の木々は呼吸をし、濡れて常緑樹の葉色は深く、鮮やかになっていた。瑞々しい。鼓動。動揺を感じる。囁く智慧の言葉や想いに耽る。眼差しを感じる。魂のある深い表情を。生命を感じる。

イユノはその大木の前に立った。

幹に手を触れる。

樹幹は瞑目し、瞑想しているかのようにであった。昨晚の夢以来、すべての存在者に言語と思考とがあるに違いないという予兆がイユノの中には孕んでいた。ただ周波数が違うから、互いに相手の言語コミュニケーションや思考方法が理解できず、それが無いものにか見えないというだけだ。

海や陸を、大地を、山脈や溪谷を形成する龍脈の鼓動。イユノはそれが樹幹に伝わって脈打っているのを感じている。

これが知性。眞のロゴス。実在する真理、実存する叡智だ。万物万象に融通する共通言語、思考、真理。

ああ、これは。凄いや。凄過ぎるよ。

人間の言葉や思考が形骸に想える。そう想うときすべての価値観が虚しい存在に想える。価値観につられた欲望が儚いものに想える。物欲・所有への欲や名誉・支配への欲、自己肯定にあくせくする欲、そして愛も正義も、真実への欲も……

リアルに比べれば。この現実には、現実を動かしている叡智に比べれば。物理的なこの思考、この意欲、星雲の渦巻く宇宙のこの息吹、真の生命に比べれば。

宇宙 Universe.

初めて感じる感情だった。

宇宙の存在の圧倒的な深厳さ、巨大さがイユノに迫る。かつて経験したことの無い畏怖の感覚、いや、畏怖だろうか、この根源的な震撼は。

高みの靈性を感じる。その大きな存在を感じる。神に近い。聖の聖なる崇高の神に。まさにそうだ。高き蒼穹の雲の上より遙か高き、神の聖なる崇高さを目の前にしたかのように感じる。

魂が震えた。

無理もないことである。我々は普段、いとも簡単に宇宙という言葉葉を口にするが、そもそも人は大いなる宇宙の実在性を実感しているだろうか。無数の星の散る宇宙、その存在を、いったい、我々人間は理解できるものであろうか。

人はどこまでも聳える嶺の続くヒマラヤやアルプスの山脈を崇高で巨大だと思うが、それも地球に比べれば一握りの土くれでしかない。だがその地球も太陽系の中では砂粒にさえならない。太陽系は2億2千万年以上かけて銀河系の中を一公転し、銀河系に比べれば塵にさえならない。

銀河系は銀河団の中では数十個または数千個の銀河系のうちの1つでしかなく、銀河団は超銀河団の一部でしかない。超銀河団は光でさえ1億年もかかるほどの大きさだが、超銀河団はさらに巨大な超銀河団の集合体をつくる。そして宇宙はその集合体をも遙かに超えて巨大だ。

彼女が感じた根源的震撼は想像を絶するだろう。

目眩でふらつきながら、ようやく大樹を離れた。

もつれそうになる足で、修羅の社にたどり着く。あたかも祖霊神に救いを求めるかのように。

「どうしたの、わたし。体が熱い。ああ、神さま、たすけてください。怖いよ」

眸ひとみを上げて神像を見たとき、イユノは驚愕した。まるで修羅（犍けん羅婁）像が生命を得て、生きているかのように見えたからだ。

爛爛たる龍神のような双眸。全身が鮮やかな朱紅赤緋の紋様が燦のように滾り、三面六臂さんめんろくつぱ、裳もをまとつただけの裸身に条帛じょうはく（襷たすき）のように肩にかける布）と天衣てんね（肩から胸に垂らす長い布）をかけて胸飾りをし、生命や躍動感に漲り満ちあふれ、臂釧ひせんや腕釧わんせんがまるで動いているかのように見える。

それはあたかもこう言っているかのように、イユノには感じられた。いや、聞こえた。

「いったい、汝は誰に救いを求めるのか。すべては余でしかない。すなわち汝は余に懇願しているのだ。

ムダだ。余は世界のすべてである。すべてが余である。余の意趣に合致しないものは存在し得ない。なぜならば余は一切であり、万全万能完全だからである。余に逆らう者はありません。逆らい方が在り得ないからである。

余の法は世界そのものだ。よって余に違和はない。異逆もない。一切は余に合法だ。

すべてが余の望みどおりである。余の望みに一致しない物事の在り方が在り得ない。永遠の過去から永遠の未来に至るまで、余の法を破る者は存在しない。存在し得ない。余の法を破るという在り方がの形が在り得ないからである。よって余は何人をも罰したことはない。

余に抗うことなど不可能である。すべてが余の思惑、余の計略であるゆえに。余の意志に叛いた者など過去にも未来にも永劫に在り

得ない。

すべてが余の為したこと、一切が余の責任だ。なぜならば余がすべてであるからである。

余は時間よりも古く、空間より広大だ。余は宇宙よりも巨大である。

余は永遠よりも長く、存在よりもリアルだ。非存在ですら余の部分でしかない。

余は非「余」ですらある。

全体とか部分とかいう言葉は余にとっては意味がない。

いや、それ以前に余の前においては概念自体の設定コンセプトが潰滅する」

その言葉は宇宙に木霊するかのようであった。昨晚の夢のような飛翔感に襲われる。光の氾濫の洪水に襲われ、まばゆい黄金の潮に吞まれ、広大なその海の中に何もかもが見えなくなり、気が遠のいて意識を喪う。

修羅像は獅子の鬣のような燃える光の翼を持った青龍になっていた。

気がつくといユノは神社の鳥居の前に坐っている。

でも夢じゃない。

感触が意識に残っている。

この感じ……そう。これが……

ぼんやりと心のどこかでそんな風に感じていた。

眩暈めまいが。気分が悪いわけじゃない。いや、そうかどうかもわからない。

帰ろう。

辛うじてそう思えた。

立つまで数秒かかった。歩く。

路に立って立ち止まり、神社の杜を振り返る。杜も見返す。永遠

の中に吸い込まれそうだった。

「さあ、行こうよ」

そう言ったが、自分に対してでも誰に対してでもない。

イユノはそのとき、道端の草を踏んでいる自分に気がついた。草は既に折れている。

哀れに想える。人に踏まれていともたやすく折られてしまう路傍の草の命も、人の命と同じ。人の命もまた草と同じでたやすい。人生はかろらかで、自由で清々しい。惜しみ^{すが}継るべきものではない。それが不死ではないか……

脳がオートマテイクにそんなことを考えていた。

脚も自動的に動く、意志に関係なく。右足が前に出て、次に左が。左右の風景が少しずつ過ぎ去って逝く。時が経つのだと思う。すべては捻^{ひね}って絡み合わせて撚り出された刹那の現象に過ぎない。もしもそれが解^ほれて正気を喪えばマテリアルはわたしであっても、それはもうわたしではないのだ。すべては微妙なバランスで瞬間に生じたものなのだ。

どうやって家まで帰ったかはつきりは憶えていない。

ベッドに倒れこみ、シーツを泥で汚してしまう。気にならない、幸せなもの憂さ。

静謐に充足した感情。

眠っているのではない。イユノは独り、漠然と耽^{たの}っていた。自分が取得したものに浸っていた。

深夜になった。

手を見たとき、砂金のような霧が手の動きの軌跡に燦めくのが見えた。

「うわあつ、何なの」

だがそれが当然だとも感じていた。

体の芯から噴火のように熱いエネルギーが湧いてくる。

「ああ、凄^{すご}いよ」

無意識に立ち上がる。鏡を見る。何も変わっていないのに別人だ

った。眼がアンタレスのように、燃えるよう強く耀いている。肌も黄金のオーラで燦々としている。双眸をかつと見開くと部屋全体が黄金を帯びた黄白色に燦々と輝く。

「信じられない：・ほんとなの？」

自然と言葉が洩れた。悦びが奥から込み上げる。生まれ変わったような気分だった。細胞のすべてが新鮮になり、生き生きと呼吸している。全身の血液が新しくなったような感覚だ。ああ、生まれた。わたしは今、生まれた。

「Ahaaaaaa…… 気持ちいい」

はっとした。あの夢はデジャ・ヴ *déjà vu* (既視 *already seen*) だったのか、そう思えたのだ。

それと同時に、深い黄昏のような、懐かしい感情が生まれていた。それは喻えば幼いときに記憶から喪われ、そのままずっと封印され、忘れ去られていた、自分が本当は誰であつたかを思い出したかのような、深い感情だった。

そうよ。

わたしは修羅なんだわ。修羅だったのよ、初めから。

ああ、何で気がつかなかったんだろう。もっと早く気がつけばよかった。もっと早く自分に還りたかった。

こんなあたりまえなことに何で気がつかなかったんだろう、本当に！ 騙されていたわ！ そうとしか思えない。

いまにして思えば、すべてが決まっていた運命のように感じる。娑斗獅にフラれなければこの覚醒はなかった。あの辛い思いはただこの瞬間を導くためのプロローグに過ぎなかったんだ。そんな風に思えてしまうほどの深い、充実した快樂、拡がり、鮮やかな瑞々しいリアルな感覚……

そのときだ。

枢機卿イヴィルが現われ、恭うやうやしく礼をした。

